『菅原贈太政大臣歌集』（文化十二年刊・鱸貞治編）―翻刻と解題―

妹尾好信

【キーワード】菅原贈太政大臣歌集　菅原道真　道真家集　鱸貞治

〔凡例〕

一　鱸貞治編『菅原贈太政大臣歌集』（文化十二年刊）を架蔵本により翻刻し、解題を付した。

一　翻刻にあたっては、次のような処理を施した。

1　変体仮名はすべて現行の字体に改め、漢字についてもできる限り現行の字体に改めて表記した。

2　和歌は、底本では一行に書かれているが、翻刻では字数の関係で二行に渡った場合がある。詞書の改行は底本通りとした。

3　序・跋に関しては、底本の改行をそのままに記した。

一　各歌には通し番号を付した。

一　和歌の後に、典拠と考えられる歌書名と部立・歌番号を示し、詞書と作者名表記も記した。本文に異同がある場合はそれも記した。歌番号と本文の引用はすべて『新編国歌大観』によった。

一　底本の丁番号を各丁の冒頭に《　》に入れて示した。《1オ》は第1丁表を、《1ウ》は第1丁裏を示す。丁番号は底本の丁付に一致する。序については、底本では本文とは別に丁付がなされているので、《序1オ》《序1ウ》のように示した。

一　底本本文部分の各丁裏には挿絵が置かれている。全九面の挿絵をそれぞれ〔絵1〕～〔絵9〕と番号をつけてその所在位置を示し、そこから近い位置に挿絵を図版として示し、簡単なキャプションを付け、該当すると思われる歌番号を記した。

一　解題は、書誌事項を中心に本書の特色について簡略に記した。

菅公御歌集　全」（外題）

《序1オ》

菅原贈太政大臣歌集序

夫歌之為道也。

本邦神明之至誠。而王政之要

道也。足以動天地知萬物之情

性矣。苟正誠述之。則鬼神感応。

礼讓温和焉。菅原公即其人也。

公起為萬乗之賢輔。而能到四

海之昇平。精忠儼然。実為聖代

《序1ウ》

之父宗也。不図一羅于藤原左

大臣之讒。而譴謫於太宰府。遂

薨于筑紫。是以公之歌半亡矣。

惜哉僅存于世者。或以懐旧遺

憾之歌。強為公之詠歌。而謾伝

之焉。皆好事者。所偽造也。公之

忠誠。豈有此詠乎。徐貞治。欲嘗

校訂其実者数歳矣。貞治慇懃

《序2オ》

於此誼也。凡与公之歌者。至国

史諸書及俗伝之説。無不尽採

而索覧焉。貞治。有此挙而後人

無疑於公矣。実為当時之美事

也。即集公之詠歌若干首。号曰

菅原贈太政大臣歌集。庶幾後

学之児童。此集以像想公之志

操与盛徳。則使神明降昭鑑之

《序2ウ》

意。以筆硯而祉福于不朽者。亦

復何疑乎。

文化十二年乙亥秋七月

上毛　河井纓謹撰

（「橘氏」印）（「子濯」印）

《1オ》

菅原贈太政大臣歌集

寛平の御時せられける菊合にすはまを
つくりて菊の花うゑたりけるにくはへたり
ける歌吹上の浜のかたに菊うゑたり
けるをよめる

1　秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか

（『古今集』巻第五・秋歌下・272「おなじ御時（寛平御時）せられけるきく
あはせに、すはまをつくりて菊の花うゑたりけるにくはへたりけるうた、
ふきあげのはまのかたにきくうゑたりけるによめる　すがはらの朝臣」）

法皇奈良におはしましける時に手向山にて
よめる

2　此たひは幣もとりあへす手向山紅葉の錦神のまに〳〵

（『古今集』巻第九・羇旅歌・420「朱雀院のならにおはしましたりける時に
たむけ山にてよみける　すがはらの朝臣」）

《1ウ》〔絵1〕

《2オ》

法皇宮之滝と云所御覧しける御供にて

3　水引の白糸はへて織はたは旅の衣にたちやかさねん

（『後撰集』巻第十九・羇旅・1356「法皇宮のたきといふ所御覧じける御ともにて　菅原右大臣」）

〔絵1〕宇多法皇に従って奈良へ行く（2）

道まかりけるついてにひくらしの山をまかり
はへりて

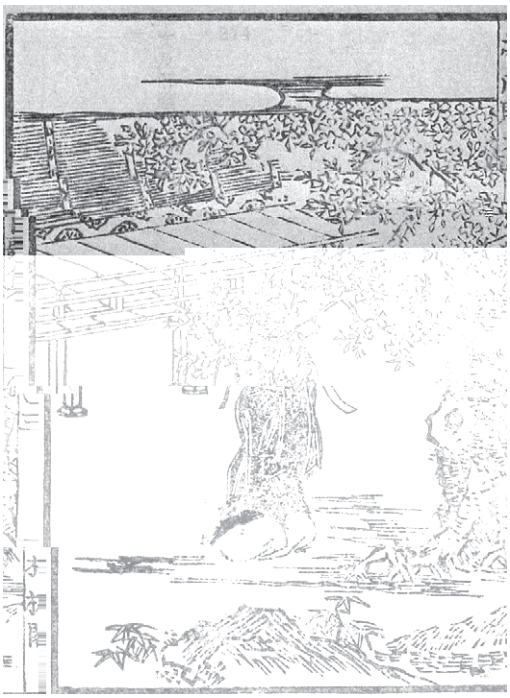
4　ひくらしの山路をくらみ小夜更て木の末毎に紅葉懸ける

（『後撰集』巻第十九・羇旅・1357「道まかりけるついでに、ひぐらしの山を
まかり侍りて（菅原右大臣）」）

藤の花をよめる

5　紫の糸よりかけて咲藤の匂ひに人や立とまるらん

（『新続古今集』巻第二十・神祇歌・2079「これは北野の御歌となん」〈左注〉、第三句「一枝は」）



〔絵３〕前戯の桜の枝に和歌を結び付ける（9）

萱草をよめる

12　わすれ草なのみ成けりみるからにことのはしけく成まさりつゝ

（『万代集』巻第十五・雑歌二・3061「萱草を　菅贈太政大臣」）

流され侍りける時家の梅の花を見侍て

13　東風ふかは匂ひおこせよ梅の花主なしとて春を忘るな

（『拾遺集』巻第十六・雑春・1006「ながされ侍りける時、家のむめの花を見侍りて　贈太政大臣」、＝『拾遺抄』巻第九・雑上・378「ながされてまかり侍りけるとき、いへの梅の花を見侍りて　菅家御」）

萩をよめる

14　まとろますねをのみそ鳴萩の花色めく秋は過にし物を

（『続後撰集』巻第十六・雑歌上・1088「萩を　菅贈太政大臣」）

題しらす

《4ウ》〔絵4〕

《5オ》

〔絵４〕流罪が決まって家の梅花を見る（13）

15　草葉には玉と見えつゝわひ人の袖の涙の秋の白露
（『新古今集』巻第五・秋歌下・461「（だいしらず）　菅贈太政大臣」）

かさゝきをよめる

16　彦星の行あひをまつ鵲のわたせる橋を我にかさなん
（『新古今集』巻第十八・雑歌下・1700「かささぎ　（菅贈太政大臣）」）

流され侍りける時

17　あめのしたのかるゝ人のなければはやきてしぬれ衣ひるよしもなき
（『拾遺集』巻第十九・雑恋・1216「ながされ侍りける時　贈太政大臣」）

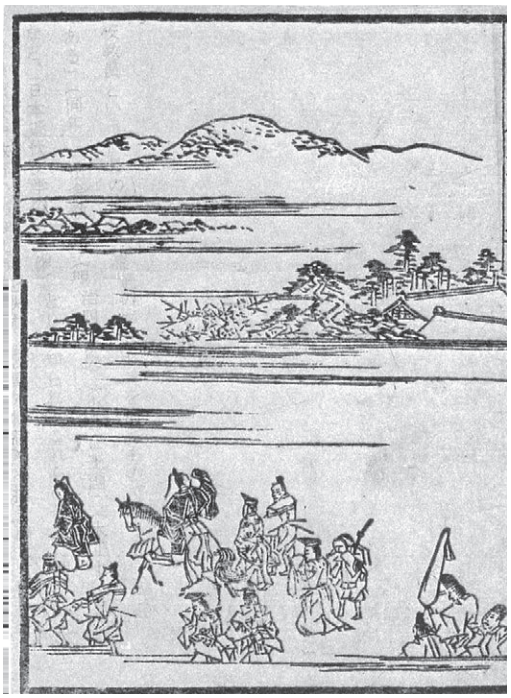
なかされ侍りて後いひおこせて侍ける

18　君か住やとの梢をゆく〳〵もかくるゝまてにかへり見しはや
（『拾遺集』巻第六・別・351「ながされ侍りてのち、いひおこせて侍りける　贈太政大臣」、第三句「ゆくゆくと」＝『拾遺抄』巻第六・別・227「ながされはべりて後めのとのもとにいひおこせて侍りける　贈太政大臣」、第三句「ゆくゆくと」）

題しらす

19　撫子のうすくもこくも日くるれはみん人分て思ひさためよ
（『続古今集』巻第七・神祇歌・688「この三首は北野の御歌となん」〈左注〉）

《5ウ》〔絵5〕



〔絵５〕流謫の旅の道中詠歌する（18）

《6オ》

帰雁をよめる

20　雁かねの秋なくことはことわりそかへる春さへ何か悲しき
（『続後撰集』巻第二・春歌中・57「帰雁を　菅贈太政大臣」）

道をよめる

21　刈萱の関守にのみ見えつるは人もゆるさぬ道辺なりけり
（『新古今集』巻第十八・雑歌下・1698「道　（菅贈太政大臣）」）

題しらす

22　竹のよも我世もともに老にしをくち葉さやにもおける霜哉

（『続古今集』巻第七・神祇歌・689「この三首は北野の御歌となん」〈左注〉）

柳をよめる

23　道の辺の朽木の柳春くれは哀れむかしと忍はれそする

（『新古今集』巻第十六・雑歌上・1449「柳を　菅贈太政大臣」）

流され侍ける道にて読はへりける

《6ウ》〔絵6〕

〔絵6〕流謫の旅の途中、風景を見る（21）

《7オ》

24　あまつ星道もやとりもありなから空にうきてもおもほゆる哉

（『拾遺集』巻第八・雑上・479「ながされ侍りけるみちにてよみ侍りける　贈太政大臣」）

鶯をよめる

25　谷ふかみ春のひかりのおそけれは雪につゝめる鶯のこゑ

（『新古今集』巻第十六・雑歌上・1441「うぐひすを　菅贈太政大臣」）

雪をよめる

26　花とちり玉と見えつゝあさむけは雪ふる里そ夢に見えける

（『新古今集』巻第十八・雑歌下・1695「雪　（菅贈太政大臣）」）

霧をよめる

27　霧立て照日の本はみえすともみはまとはれしよるへ有やと

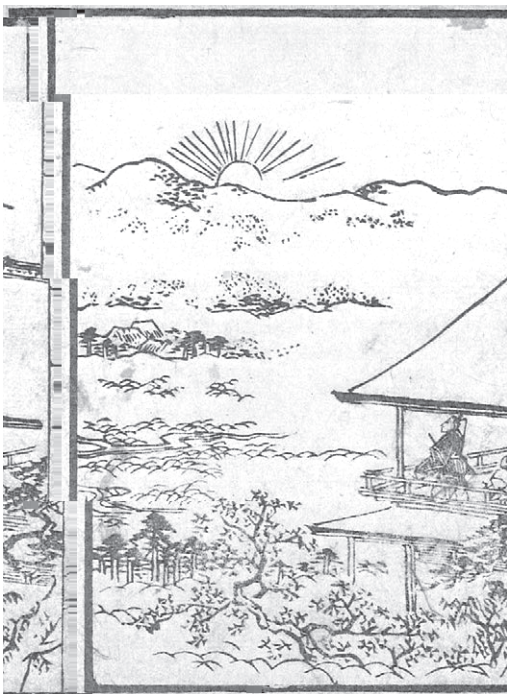
（『新古今集』巻第十八・雑下・1694「霧　（菅贈太政大臣）」）

題しらす

28　夕されは野にも山にも立煙なけきよりこそもえ増りけれ

（『万代集』巻第十五・雑歌二・3054「（題しらず）　菅贈太政大臣」）

《7ウ》〔絵7〕



〔絵７〕流謫の地で日の出を見る（35）

《８オ》

月をよめる

29　月ことになかると思ひしますかゝみ西のうらにもとまらさりけり

（『新古今集』巻第十八・雑歌下・1692「月　（菅贈太政大臣）」、第四句「西のそらにも」）

野を読る

30　筑紫にもむらさき生る野辺はあれとなき名悲しむ人そきこえぬ

（『新古今集』巻第十八・雑歌下・1697「野　（菅贈太政大臣）」、第四句「なきなかなしぶ」）

山をよめる

31　足曳のかなたこなたに道はあれと都へいさといふ人のなき

（『新古今集』巻第十八・雑歌下・1690「山　菅贈太政大臣」、末句「いふ人ぞなき」）

なみをよめる

32　なかれ木と立しら浪とやく塩といつれかからきわたつみの底

（『新古今集』巻第十八・雑歌下・1701「波　（菅贈太政大臣）」）

梅をよめる

《８ウ》〔絵８〕

《９オ》

33　ふる雪に色まとはせる梅の花鶯のみやわきて忍はん

（『新古今集』巻第十六・雑歌上・1442「梅　（菅贈太政大臣）」）

うみをよめる

34　海ならすたゝへる水の底までも清き心は月そてらさん

（『新古今集』巻第十八・雑歌下・1699「海　（菅贈太政大臣）」、第三句「底

までに」）

〔絵８〕流謫の地で雪中の梅と鶯を見る（33）

日をよめる

35　あまのはらあかねさし出るひかりには何れの沼かさへ残るへき

（『新古今集』巻第十八・雑歌下・1691「日（菅贈太政大臣）」）

雲をよめる

36　山わかれ飛行雲のかへりくる影見る時はなほ頼れぬ

（『新古今集』巻第十八・雑歌下・1693「雲（菅贈太政大臣）」）

松をよめる

37　老ぬとて松はみとりそまさりけるわか黒髪の雪のさむさに

（『新古今集』巻第十八・雑歌下・1696「松（菅贈太政大臣）」）

《9ウ》〔絵9〕

〔絵９〕海と月の風景（34）

《10オ》

うき木といふ心をよめる

38　なかれ木もみとせありてはあひみてん世のうき事そかへらさりける

（『拾遺集』巻第八・雑上・480「うき木といふ心を（贈太政大臣）」）

《10ウ》

菅原贈太政大臣歌集のおくかき

うつ蝉の世に高きいやしき老たる若きをいはすたふ
とみかしこめる菅原のきみの物せさせ玉ひつる外国
のかたなる文かつ詩ともの心深く詞のたへなるこゝの
古き書ともに数多見えたるかそれたにあかぬこゝち
すめるをみ国ふりのしらへはえきのみ世よりつき〳〵
の帝の撰みにもいと稀らなるか中に大方かさすらひ
の後のあはれなるふしのみ見えて月花にみこゝろ
よせたまふしらへの数あらぬは口をしき業になむ

《11オ》

かゝれは古き新しきをいはすくさ〳〵の歌ふみよりえり出
つゝかきつめても見まほしく思ひをりしを何くれといと
まなくてすくし来つるにひと日鱸貞治主のとひきて
いへらく此きみのいつくしみを仰けるあまり菅家御集
にたくひたる限りをみるになからはのち人の物せし
にやあらむ古きをしたひ思ひを述るのしらへ多くある
はあたし人のをもてしひて此君のなりとすめる
なとなか〳〵に清きみ名をくたし初学の輩をま
とはしむる罪のかれ難くこそさるはよき写しまき

《11ウ》

ゑり巻ともをえて考へ正さむと思へる事あまた
としにして終にそのことならすよりて先々世〳〵の
撰集をはしめくさ〳〵の歌ふみに見えてしかも
ことのたゝしくしらへのいうなるのみをえり出て一
巻とせりそか中に雪のよや都の空になとの
くさはひその外世の人の耳にふれたる後の書とも
にこれかれのすといへともいまた正しきものにみること
なく其姿もこのきみの口つきに似されははふき
たりもしひか業にしもあらすはこれかおくかき

《12オ》

してよとこへりつら〳〵うちみるに誠にことの
たゝしくしらへのいうなるのみなるを世のひと
此きみのにかきりてえせ歌もていひ伝ふるは
かのこかねをとろにつゝみ宝珠を土に埋むの
譬にひとしからさらめやはさてかきつめたる
うたのいと乏しきにくらふれはしりへにあらはせる
書ともの多きをいふかしくおもはん心も有へけれと
そは世ゝの帝の撰にもれてたゝひとつ見えたる
をもらさすまた同し歌のいさゝかことなるか

《12ウ》

ことの聞えよきをは後といへともいとはすまさしく

誤れりとおもへるは古きかたなるも捨つれとそれ
もなへてはそれにあけつとなむうひ学ひの
輩おもひ深めてくり返し見は此きみの限あらぬ
あとをもさとり貞治ぬしか心さしの浅からぬ
をもしりぬへくこそ
　文化十二年七月廿日まりいつかの日
　　正木千幹しるす

〔解　題〕

一　底本書誌

本書は、菅原道真の詠歌を勅撰和歌集その他の歌書から集めて編纂した歌集である。

はじめに、底本とした架蔵本の書誌を記す。

小本一冊。表紙の寸法、縦一六・一cm×横一一・二cm。楮紙袋綴。錆浅葱色無地の紙表紙の左上部に赤朽葉色の題簽を貼り、「菅公御歌集　全」と墨書。表紙は原装と思われるが題簽は後補のものである。見返は本文共紙、見返題はない。匡郭は四周単辺。本文一面九行書。序は八行書、跋は本文と同じく九行書。序二丁と本文・跋一二丁の全一四丁。刊記はない。本文部分九丁の各裏面に挿絵がある（最後の絵に「雪旦図」と署名・落款がある）。巻首題「菅原贈太政大臣歌集」、序題・跋題も同じ。柱刻に「松楓閣」とあり。巻首に、文化十二年七月の河井纓による漢文序、巻尾に、同年同月の正木千幹による和文序がある。巻首と巻尾の欄外に「吉村」の小型丸印があるがいずれも墨で抹消、後見返左下隅に「松文堂書店」の角型朱印がある。

本書の編者は、序に「貞治」とあり「跋」に「鱸貞治主」とあるごとく、鱸貞治であり、成立は文化十二年（一八一五）であることが序・跋から知られる。

二　伝本状況

本書の伝本状況について、『補訂版 国書総目録』第三巻（一九九〇年　岩波書店）を繙くと、次のようにある。

○**菅原贈太政大臣歌集**（すがわらぞうだいじょうだいじんかしゅう）　一冊　類歌集　著菅原道真詠、鱸（穂積）貞治編　成文化一二刊　写東北大（狩野）（「菅原贈太政大臣和歌」、文政四由比演義写）・日大　版静嘉・東博・慶大・早大・東北大（狩野）・天理（撰集菅公歌鈔と合）・無窮（織田・神習）・旧彰考・漆山又四郎

とあって、静嘉堂文庫、東京国立博物館、慶應義塾大学、早稲田大学、東北大学狩野文庫、天理図書館、無窮会図書館（二部）、旧彰考館文庫、漆山又四郎氏蔵本の九本と、東北大学狩野文庫と日本大学に写本が存することを記す。また『国書総目録』の続編である『古典籍総合目録』第二巻（一九九〇年　岩波書店）には、

菅原贈太政大臣歌集（すがわらぞうだいじょうだいじんかしゅう）　一冊　類歌集　著菅原道真詠　鱸貞治編　成文化一二刊　版文化一二版―玉川大（一冊）・天満宮（「菅原贈太政大臣歌集」一冊）（「菅原贈太政大臣家集」一冊）、その他―栃木（黒崎）（「菅贈太政大臣歌集」一冊）

とあり、玉川大学、大阪天満宮（二部）、栃木県立図書館黒崎文庫蔵本の四点が追加される。

一方、『私家集伝本書目』（昭和40年　明治書院）の「菅原道真」の項目には、

菅贈太政大臣歌集　一　文化一二刊　東北大・慶大・書陵部・静嘉堂・無窮会・早大・志香須賀・岡山清心女大

とあるので、別に宮内庁書陵部、志香須賀文庫（久曽神昇氏）、ノートルダム清心女子大学蔵本が知られる。

そして、国文学研究資料館の「日本古典籍総合目録データベース」で検索すると、二〇一八年九月現在、次のように七点の伝本が登録されている。

1　菅原贈太政大臣歌集、弘前市弘前図、W九一一・一三―一三、刊、文化一二、一冊、小

2　2

れる。

以上で、だいたい一八点の伝本の存在が知られる（旧彰考館蔵本のように現存しないものも含む）。江戸時代後期の刊本にしては伝本数はそう多くないと言ってよい。

三　欠損した刊記

ところで、底本とした架蔵本には刊記がない。どうやらこれはもともとなかったのではなく、欠損したもののようである。正木千幹の跋文の後に一丁切り取られたような跡が認められるからである。

そこで、国文学研究資料館の「新日本古典籍総合データベース」に公開されている画像を見ると、確かに跋文の後に一丁あって、表面には「道真公世系」と題して祖先神から道真の子女までの系図が示されている。そして裏面には、次のように記されている。

引用書目

古今集　後撰集　拾遺集
新古今集　続古今集　玉葉集
新拾遺集　新続古今集　続後撰集
夫木集　古今六帖　寛平菊合
万代集　新撰朗詠集　雲葉集

総計一十五部

東都　鱸　貞治編纂

清水浜臣大人
正木千幹大人　同校

文化十一乙亥歳次七月新刊　松楓閣蔵板

ここに刊記があったわけで、これによると本書は文化十一年（一八一四）の刊行となるが、同年は「甲戌」の年であり、「乙亥」は翌十二年である。河井纓の序も正木千幹の跋も文化十二年であるので、「文化十一」とあるのは「十二」の誤りと見られる。したがって本書は文化十二年の刊行とされているのであろう。

蔵版は、江戸の「松楓閣」で、版心にも刻まれている。ここが版元なのであろう。

そして、この刊記には、本書の編者が鱸貞治であることを明記し、あわせて、清水浜臣と正木千幹が校訂したことを記している。鱸貞治については伝未詳。『補訂版　国書総目録　著者別索引』（一九九一年岩波書店）には、

鱸貞治（穂積―）　菅原贈太政大臣歌集編（文化一二刊）

とあって、本書の編者であることを記すのみ。穂積姓を名乗った由を記すが根拠は不明である。跋文を記した正木千幹とは親しかったようだし、千幹とともに清水浜臣にも校訂（校閲か）をしてもらっているので、浜臣とも繋がりのある人物であるようだ。

千幹は江戸の人。安永六年（一七七七）に生まれ、文政六年（一八二三）に四十七歳で没した。加藤千蔭門。文化十二年現在三十八歳。清水浜臣も江戸の人。安永五年（一七七六）生まれ。文

政七年（一八二四）没、享年四十九。村田春海門。文化十二年には三十九歳。貞治もおそらく彼らと同年配で、江戸で国学を学び、千蔭や春海とも近かった人物であろう。一方、序を寄せた河井纓は漢学者かと思われるが、これも伝未詳である。

四　編集方針

刊記と同じ面に「引用書目」とあって、十五点の歌書名が列記されている。本書に掲載された道真歌の典拠となった歌書である。『古今集』『後撰集』『拾遺集』『新古今集』『続後撰集』『続古今集』『玉葉集』『新拾遺集』『新続古今集』が勅撰集、『古今六帖』『万代集』『夫木集』『雲葉集』が私撰集、それに『寛平菊合』と『新撰朗詠集』が加わる。採歌資料をこれらの範囲に限ったのは、道真真作の和歌を載せるという編集方針によるものである。道真の真作として勅撰集入集歌が最も信憑性が高く、平安・鎌倉時代の私撰集がそれに次ぐという認識が明確で、同じ平安時代の作品でも、『大鏡』は伝承性が高いとして排除したものと思われる。中世以降盛んに造られた道真家集の類がおよそ道真の真作とは思えない和歌ばかりを載せていることへの反発から、鱸貞治は極めて禁欲的な姿勢で編集作業を行なったわけである。

なお、翻刻では、和歌の後に典拠と思しき歌書における同歌の所在を掲げたが、勅撰集（『拾遺抄』を含む）と、勅撰集に載らない和歌については『万代集』に限って掲げた。ここに挙げられている歌書に載っている和歌は次の通り。

・『古今六帖』

1番歌（第六・きく・3733）

前の都での詠歌で、内裏での菊合の歌を冒頭に、宇多法皇の重臣として御幸に従っては詠んだ和歌が多く並ぶ。9番歌から17番歌までが、太宰府への左遷となり、都を離れる際の心境を詠んだ歌、18番歌から24番歌までが太宰府への旅の道中詠、そして25番歌以降が配流の地太宰府での詠歌という配列である。あたかも、詠歌を通して道真の伝記を読者に知らしめようとしているかのように思える。

本書は、各丁に挿絵を配するなど、啓蒙的色彩の濃い刊行物である。千幹が跋文の末尾に「うひ学びの輩おもひ深めてくり返し見ば、此きみ（道真）の限あらぬあとをもさとり、貞治ぬしが心ざしの浅からぬをもしりぬべくこそ」と言っている通りであると思う。簡便な道真歌入門書としてもっと読者に迎えられてしかるべきかと思われるが、さほど世に流布しなかったようなのはなぜなのであろうか。

追記　武井和人氏著『中世和歌の文献学的研究』（平成元年　笠間書院）の第5章「菅原道真仮託家集・百首研究序説」において、本書を編纂本の一つに上げられ、編纂者を「水戸穂積貞治」とし、伝本所蔵者として本稿に挙げた以外に多和文庫と麗沢大学を記している。

Reprint of "*Sugawara Zo-Dajoudaijin Kashū*" (The Waka Poetry of Sugawara-no-Michizane), with an Annotated Bibliography

Yoshinobu SENO

Sugawara Zo-Dajoudaijin Kashū, which was compiled and published by Sadaharu Suzuki in 1815, is a collection of *waka* poetry. These poems are considered to be, with a high level of certainty, authentic works composed by Sugawara-no-Michizane. In it, thirty-eight *waka* poems are arranged in chronological order. Although this book has been published, few copies of this book remain. In addition, as this book is not well known, the complete text was included, and its original illustrations were inserted as figures. Then, an annotated bibliography was added in which the characteristics of this book were examined.